

LMS を活用したアカデミック・ライティング科目の授業実践

小林雄志

Practice of Academic Writing Course using LMS

Yuji KOBAYASHI

要旨

本稿では、LMS を活用したアカデミック・ライティング科目の実践例を報告し、ライティング支援に関する今後の方向性等について検討した。本授業での LMS 活用内容は主に、①資料（授業スライドおよび参考資料）の配布、②授業時の課題・コメント収集、③原稿（草稿、第一次原稿、最終原稿等）の提出およびフィードバック、の 3 点であった。LMS の活用は、授業内外において学生と教員とのコミュニケーションを活発にし、ライティング課題の作成を円滑に進めるうえで極めて有効であったが、教員側がある程度、LMS 活用能力を備えていなければならない、また、コース作成の労力もそれなりにかかるため、今後、より多くのアカデミック・ライティング担当教員に LMS を活用してもらうためには、こうした課題を克服していく必要があると考えられる。

キーワード：アクティブラーニング、ライティング能力育成、学習支援、授業時間外学修、Moodle

1. はじめに

近年、日本の多くの大学においてアカデミック・ライティングに関する科目が開講されるようになってきている。また、それらの授業のサポートや、その他のレポート作成の支援等を目的として、ライティングセンターを立ち上げる大学も数多く存在している（藤枝, 2019）。岡山大学においても、アカデミック・ライティング科目に関する検討が行われ、授業の開講ならびに教科書の作成が行われてきた（齋藤他, 2018）。前述のとおり、多くの大学においてはライティングセンターを立ち上げるなど、アカデミック・ライティング授業の支援や、その他のレポート課題に対する学生への支援が行われているが、本学では大学附属の図書館において学生へのサポートが一部行われているのみであり、授業担当者へのサポートが充実しているとは言えない。このような状況の中では、担当教員自らの力で授業を効果・効率的に管理・運営していくことが求められるが、担当教員の授業運営の負担を少しでも軽減し、且つ受講者のライティング課題作成を支援するためのツールとして、学習管理システム（Learning Management System: LMS）が考えられる。本学では、2017 年度まで全学の LMS として運用されてきた WebClass から 2018 年度に Moodle への本格移行が行われ、利用できる機能や汎用性が大幅に向上した。Moodle を活用した授業事例も多数、見受けられるようになってきている（小林, 2017）。しかしながら、Moodle はさまざまな使用方法があるがゆえに、ある科目の実践例が他の科目の実践にあまり参考にならない場合も多く、やはり科目に特化した使用事例を多く蓄積し、その中で多くの教員が活用可能な方法を抽出していくことが必要であると感じられる。そこで本稿では、LMS を活用したアカデミック・ライティング科目の実践例を報告し、ライティング支援に関する今後の方向性等について検討していくこととする。

2. 当該科目の概要

本稿において紹介するのは、2018 年度に教養教育科目として実施された「アカデミック・ライティング」である。本科目は、当該年度においては、11 名の教員が開講していたが、ここでは筆者が担当していた授業（第 3 学期・木曜日・5-6 時限）について紹介していく。本授業は抽選定員 20 名の選択科目として開講されたが、最終的な受講者は 14 名となっていた。受講者の所属学部の内訳は、教育学部 10 名、医学部 2 名（医学科 1 名、保健学科 1 名）、工学部 1 名、理学部 1 名であり、学年はすべての受講者が 1 年次であった。本授業は全学部の学生が受講可能であるが、受講者は教育学部の学生が中心となった。その理由としては、本授業が健康・スポーツ科学をテーマとしており、教育学部の保健体育を専攻している学生が多く申し込んできたことが挙げられる。このことから、学生にとってはライティング科目を選択する際、「何をテーマにレポートを書くか」ということを重視している様子が伺える。そのため、アカデミック・ライティングに関する科目を開講する際は、さまざまなテーマの授業を開講し、それぞれの学生の興味に合った（所属学部の特性に合った）内容の授業を選

択できるようにすることが重要だと考えられる。本学においても、担当教員は 11 名ではあるが、その専門分野は多岐にわたっており、ある程度は学生のニーズに応えることができていたのではないかと考えられる。

それぞれの担当教員で、ライティング課題のテーマや授業の実施手順については異なっていたが、本授業共通の指導理念は「論文を書くための技量のみではなく、思考力を伸ばしたり論理的に表現したりすることを学んでいく必要がある。自分で論理的に思考したことを書くことにより表現するコミュニケーション力を養うといったことも目的となる。」となっており、目標についても全授業で共通で「①自分の考えや意見などを正確に伝える文章を書くことができる。②事実や根拠などを明らかにした論理的な文章を書くことができる。③文字や表記に注意して文章の体裁を整えることができる。」としていた。また、授業の最終的なゴールとして 3000～3600 字の課題を作成する、ということも基本的には共通させていた。筆者の担当授業については基本的に「健康・スポーツ科学」（あるいはこれに関連する事象）をテーマとして課題を作成することとなっていた。なお、授業スケジュール（案）については表 1 のとおりであった。

表 1. 授業スケジュール（案）

日付	授業タイトル	概要
10 月 4 日	第 1 回 アカデミック・ライティングとは？	概要説明（授業の目的、受講上の注意、スケジュール等） アカデミック・ライティングについて
10 月 11 日	第 2 回 テーマの発想、文献検索について	健康・スポーツ科学に関する俯瞰的な講義 文献検索について
10 月 18 日	第 3 回 テーマの検討	考えの整理（ブレインストーミング、KJ 法、マインドマップ） レポートテーマの検討
10 月 25 日	第 4 回 序論の作成	「問い」を作る。目標を仮規定し、アウトラインを作成する。 序論（はじめに）を作成する
11 月 1 日	第 5 回 草稿の作成	序論の点検・修正 フォーマットを利用して、レポートの草稿を作成する
11 月 8 日	第 6 回 草稿の点検、第一次原稿の作成	草稿の点検・修正 剽窃について・引用の仕方の確認 第一次原稿の作成
11 月 15 日	第 7 回 第一次原稿の点検・修正	第一次原稿の点検、文章表現の修正 個別フィードバック・個別相談の実施 最終原稿の作成
11 月 22 日	第 8 回 最終原稿の作成・まとめ	授業全体の振り返り 最終原稿（修正版）の提出について

3. 各授業回での実践内容

第1回 アカデミック・ライティングとは？

まず初めに、3～4人1組のグループを作ってもらい、そのうえで授業を進めていった。担当教員の自己紹介や授業の目的・目標、受講上の注意を簡単に説明したのちに、受講者同士の自己紹介を各グループで行ってもらった。受講者全員が1年生であり、少人数でのアクティブラーニング形式での授業に慣れていない学生が含まれていることも想定して、いきなり自己紹介させるのではなく、①所属・学年・名前、②スポーツ・運動の経験、③この授業を受講した理由・きっかけ、といった3点について自己紹介するように指定し、まずこれらの内容を紙に書き出して、喋る内容を整理させてから自己紹介してもらうようにした。

自己紹介の後に、具体的な授業内容の話（「アカデミック・ライティングとは？」という話）に入っていたが、いきなり、「アカデミック・ライティングとはこういうものですよ」と説明するのではなく、「普段、どんな場面どんな内容の文章を書いていますか？」ということ個人で思い出してもらい、思いついた内容をシェア（Think-Group-Share）してもらうワークを行った。このように、新しい内容に入る前に、その時点で持っている知識（既有知識）を呼び起こす、という作業はガニエの9教授事象（鈴木, 2002）を意識した授業展開である。このワークにおいて出てきた内容としては、やはりメールやSNS（LINE、ツイッター、フェイスブック等）、もしくは大学のレポート課題のために文章を書いている、というものであった。こうした意見を共有してもらったうえで、教員側から「アカデミック・ライティングとは？」という話を行い、メールやSNSの文章との違いについて考えてもらうようにした。ここで説明したアカデミック・ライティングに関する定義や特徴については大阪大学によって作成され、web上でも公開されている小冊子「阪大生のためのアカデミックライティング入門」（堀等, 2014）に記載されている内容をベースにした。

この授業回の最後には、課題（テーマ）の設定に関して簡単に説明を行い、興味のないことを書くのは苦痛になるので、基本的に自分の興味のあるものを各自設定するように伝えた。また、こうしたテーマ設定の参考になるように、各受講生が体育・スポーツに関してどのような意識を持っているか等に関するアンケートを、LMSを通じて授業中に行った。LMSを用いることで、授業中であっても瞬時に回答結果の集計が行われ、その結果をグラフによって視覚的にフィードバックできるようになるが、本授業においても回答後、すぐに集計結果に見せて、テーマ設定の参考にしてもらうことが可能となった。

第2回 テーマの発想、文献検索について

当初、シラバス上の予定としては「健康・スポーツ科学に関する俯瞰的な講義」としていたが、分野の性質上、非常に広範囲の内容になってしまい時間内に終わらなくなってしまうことや、学生の思考が発散し、收拾がつきにくくなることも考慮し、少し絞った内容の講義

をすることとした。具体的には、学生の興味等も考慮し、筆者が以前関わってきた、国立スポーツ科学センターの紹介（設立の経緯や業務の内容）やオリンピック・パラリンピックにおける象徴的なトピック（ドーピング問題や義足の発展等）を中心に、授業前半（1 時間程度）を使って講義・情報提供を行い、その後、「①気になったところ（興味を持ったところ・疑問に思ったところ）」、「②最終レポートのテーマにしてみたいこと（もっと調べてみたいこと、自分の考えを主張したいこと）」の 2 点を Word ファイルに書き出してもらった。なお、書き出した内容についてはグループでシェア・質疑応答を行って、多少のブラッシュアップを行った後に、その Word ファイルを LMS 上に提出してもらった。

小休憩後、授業後半は文献検索に関する説明と演習を行った。時間が限られていることもあり、図書館の蔵書検索方法とその演習、データベースを使った文献検索として CiNii による文献検索方法とその演習に絞って授業を行った。それぞれ検索した図書や文献の情報を Word ファイルに張り付けてもらい、そのファイルを LMS 上に提出してもらった。最後に宿題として、「授業中に検索した図書（検索しなくてもよい）を図書館から借りてきて翌週に持ってくる」、「CiNii で検索した文献の中で、PDF でダウンロード可能なものはダウンロードして PC に保存しておく」という課題を課した。

第 3 回 テーマの検討

まず、前週に課した課題（図書の借用）の確認として、3～4 人 1 組のグループで、「どうしてその書籍を借りてきたのか?」、「どのように探したか?」、「どんなところに興味を持ったか?」という内容を話し合ってもらった。これは、言葉を発し、質問を受けることで自分の考えや気持ちを整理させることを意図したものであった。この作業を行った後、発想を膨らませ、集約する方法の例としてブレインストーミングや KJ 法の説明を行い、グループで実際に作業を行ってもらった。テーマを「健康・スポーツ科学」に設定して、それぞれが興味のある内容（キーワード）を付箋に書き出してもらい（キーワード 1 つに付箋 1 枚）、ある程度の枚数が書き出せたところで、それぞれが書いた内容を模造紙もしくはホワイトボードに張り付けていき、同じような内容のものをグルーピングしていってもらった（図 1）。なお、キーワードを書き出す際は、借りてきた書籍やダウンロードしてきた文献等を参考にしてもらった。こうしてできた、グループ全体での健康スポーツ科学に関する興味・関心について、模造紙あるいはホワイトボードを眺めながら自分と他者との違いを考えながら、改めて自分の関心が何なのかを考えてもらった。

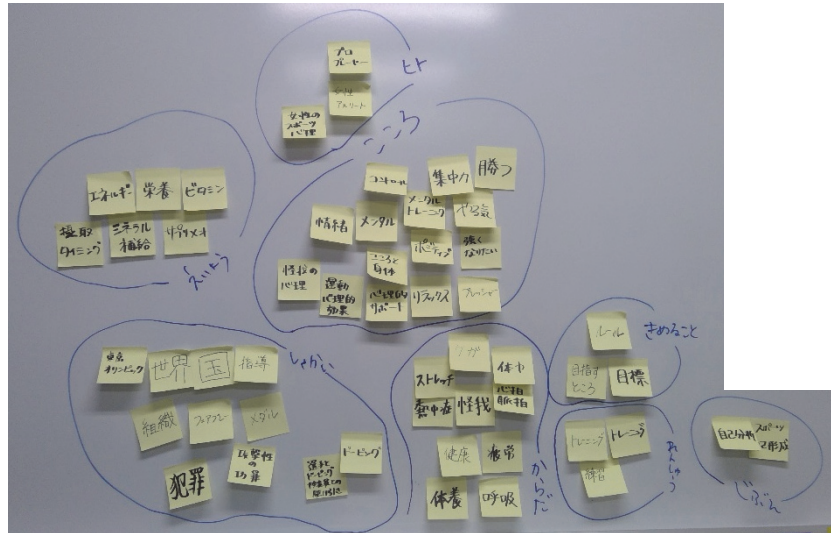


図1. ブレインストーミングの実施例

これらのグループワークを行ってもらった後に、「自分のマインドマップを書く」という個人ワークを行った。マインドマップに関する説明を簡単に行い、その後、作業に入ってもらったが、マインドマップを作成するという作業は学生全員にとって初めてということもあり、「いいもの（きれいなもの）を作ろうとするのではなく、頭に浮かんだものをそのまま書いていってもらえばよい」ということを強調するようにした。幸い、全員が比較的順調に作業を行うことができたが、これは授業前半のグループワークによってある程度、自分の考えが整理できていたことも関係していると考えられる。授業の最後には、作成したマインドマップをもとに、レポートのテーマ案を3～4個、書き出して、「興味があるか」、「意見があるか（自分の考えがあるか）」「ある程度、知識があるか（情報がありそうか）」「期間内にレポートを書き上げられそうか（壮大すぎないか）」という観点を基に、テーマを仮に1つに絞ってもらった。

第4回 序論の作成

この授業回では、「問い」を作り、レポートのアウトラインを作成したのちに、序論（はじめに）を作成する（作成し始める）という作業を行っていった。まず、自分で書き出したマインドマップを参考に、テーマに対する「問い」を作り出すという作業を行った。前週の段階で既にテーマが問いの形になっている人も、「自分が持っている疑問は何だろうか?」、「自分はこのレポートを通して何を知りたいのか?」、「自分はこのレポートで何を言いたいのか?」ということをもう一度考えたうえで、この問いに対して、「このレポートでは、Xについて論じる。Yを考察し、Zという結論を導く」という形の目標規定文を書いてもらい、レポートで目標とするものを明確にしてもらった（大島他, 2014）。

次に、アウトラインの作成を行ってもらったが、序論、本論、結論という大きな枠組みの

中で、それぞれの枠の中にどのような要素を書くかということ「埋めていく」形で作業を行っていった。アウトライン作成後は「序論」作成の作業を行った。こちらもフォーマット（井下, 2014）を参考に、これを埋めていく形で作成していった。フォーマットの文言に関しては多少の変更は可として、ひとまず完成させることを優先するよう、指示を行った。

第5回 草稿の作成

この授業回では、序論とアウトラインの点検・修正を行った後に、フォーマットを利用して、レポートの草稿を作成した。

序論の点検・修正に関しては、まずペアになって、お互い自分の序論について説明し合った後に、しばらく時間をとって相手の序論を読み、良いと感じるところ（わかりやすいところ、面白いところ、共感できるところ）にチェックを入れてもらった。また、わかりにくいところやもう少し説明が欲しいところにもチェックを入れるようにしてもらった。その後、チェックした内容を相手に伝え、質疑応答をし合って、それらの内容を踏まえて、序論の修正を行った。アウトラインの点検・修正に関しては、序論の修正・点検と同様の手順で、ペア同士で点検し合い、修正点を指摘し合ったうえで、修正した序論の内容も踏まえて行ってもらった。このように修正された序論とアウトラインを基に、レポートの草稿作成を行ってもらった。作成に当たっては、「定型表現を用いた論証型レポートのフォーマット」（井下, 2014）を活用して、これを埋めていくような形で作業を行ってもらった。最後に、次週までの課題として草稿をひとまず完成させたうえで LMS 上に提出するように指示した。

第6回 草稿の点検、第一次原稿の作成

この授業回の前半では、まず、宿題として課していたレポートの草稿について、評価シート（井下, 2014）を用いて、自分の草稿を自分で採点（自己採点・自己評価）し、「優れているところ」「改善を要するところ」をシートに記入するところから始めた。次に、評価シートを用いて、他者（3 名分）の草稿の採点を行ってもらった。そののちに、他者が自分の草稿に対して行った評価を確認し、自己評価と他者評価から、自分のレポートに置いて改善すべき点を整理してもらった。特に、自己評価と他者評価にギャップがある場合はその要因についても検討を行ように指示した。そして、これらの点検結果を基に、草稿の修正を行ってもらった。

授業の後半では、引用の仕方や剽窃についての講義を行い、「事実か意見かを明確に区別すること」や「他者の言葉と自分の言葉を明確に区別すること」について（井下, 2014）、今一度チェックするように指示した。そして授業の最後に宿題として、第一次原稿を完成させて、提出するように指示した。第一次原稿を作成してもらうのにあたり、「空欄を作らない（完成版として作成する）」、「引用の仕方や引用文献を正確に記入する」、「本文の文字数は 2000 文字以上（タイトルや引用文献リストを除く）」の 3 点を守るように指示した。

第7回 第一次原稿の点検・修正

まず、宿題であった第一次原稿の点検および修正を行っていった。手順としては、前回の草稿の場合と同じであったが、今回は完成に向けて特に誤字・脱字等の表現のチェックも入念に行うように指示した。そしてこの作業が終わったのちに、担当教員（筆者からの）個別フィードバックおよび個別相談を実施した。各個人、3～5分程度の時間をとり、主に大きな方向性についてのアドバイスを行っていった。短い時間ではあったが、学生それぞれの意向や感じている課題等を直接話し合っただけで共有することができたため、かなり有意義な時間であった。なお、自分の順番でない時間は、それぞれの原稿を修正していくように指示した。全員の個別フィードバック・個別相談が終了したのちに、最終原稿の作成についての説明を行った。第一次原稿の時点では、引用の仕方が不慣れということもあり、多くの学生が適切な引用をできていなかったため、引用文献の記入を正確に記入することや、無駄に長い引用をしないようにすることをまず強調して伝えた。また、本文の文字数はタイトルや引用文献リストを除いて3000～3600文字以上であること等、基本的な形式を守るように、改めて確認を行った。

第8回 最終原稿の作成・まとめ

最終回では、授業全体の振り返りと最終原稿（修正版）の提出についての説明を行った。まず、この授業を振り返って、①以前よりも成長できたこと・身についたこと、②うまくできなかったこと・自分に足りないと感じたこと、③成長できたこと・身についたことを今後どのように（どのような場面で）活かしていくか、④うまくできなかったこと・自分に足りないと感じたことを今後どのように改善していくかの4点について、配布した記入用紙に記入してもらい、その内容を3～4人のグループでシェアしてもらった。

そして残りの時間は最終原稿としてひとまず提出してもらったレポートをより良いものにするために点検・修正を行ってもらった。また、この時間には個別の相談への対応も行った。全体として、論理的な構成になっているかどうかのチェックはかなり出来ていたが、Wordファイルの作成にまだあまり慣れていない学生も多く、誤字・脱字（変換ミス）の修正や文字サイズ・フォントの統一、無駄な改行や空白の削除等、体裁をしっかりと整えたいように改めて指示をした。

4. LMS 活用の効果および今後の課題

前述の部分も含めて、本授業でのLMS活用内容は主に、①資料（授業スライドおよび参考資料）の配布、②授業時の課題・コメント収集、③原稿（草稿、第一次原稿、最終原稿等）の提出およびフィードバック、の3点であった。

①資料の配布については、特にレポート課題作成のための参考資料を毎回提供していた

こともあり、紙で配っていた場合は何がどこにいったか分からなくなる場合も多く生じていたと思うが、LMS 上に整理して掲載していたため、参照したい資料にすぐアクセスできていた。こうした点は、参考資料を探す時間を少しでも短くし、ライティングの作業時間なるべく長く確保するために重要であり、本授業ではこのような LMS 利用の恩恵を十分に受けることができていたと考えられる。

②授業時の課題・コメント収集については、作業したものをすぐにこちらで確認でき、提出状況も LMS 上で管理できるという点で教員側のメリットは大きかったと感じられた。一方で、学生にとっては直接提出する場合に比べて、一度 LMS にアクセスし、そこから提出しなければならないため、やや煩雑になった部分もあったかもしれない。こうした点については、LMS を通じて提出するにしても、もう少し提出しやすいシステム（例えば、カメラで撮影するだけで瞬時に提出できるようなもの等）を開発・導入するなど、改善していく必要があると感じられた。

③原稿の提出およびフィードバックについては、紙での提出や、作成したファイル等をメールで送る、といった提出よりもかなり管理がしやすく、提出も容易であったと考えられる。過去に提出したものを参照し、現在のものと比較する場合も簡単に行うことができるため、教員も学生も進捗状況がわかりやすいという点でかなりメリットがあった。また、原稿作成の過程を振り返って、各学生の成長の様子を確認できるということも大きな利点であると考えられる。フィードバックに関しても、LMS 上にコメントを残すことも容易であり、教員がチェックしたファイル（コメントを記入したファイル）を送り返すことも可能であるため、学生もそれらのフィードバックを基に、原稿の修正をすぐに行うことができていた。このように、本授業では学生と教員とが授業外でも頻繁にコミュニケーションを取り、原稿を作り上げていくうえでかなり活用を行うことができていた。ただ、このようにスムーズにやり取りを行っていくには教員が LMS ある程度慣れておく必要があり、また、アカデミック・ライティング用のコースを LMS 上に作成するという作業にそれなりの時間を割かなければいけないという課題があると感じられる。こうした課題を克服し、LMS の活用を広めていくには、LMS 利用マニュアルの作成・配布や LMS 利用講習の実施によって担当教員の LMS 活用能力を十分引き上げることや、アカデミック・ライティング用の LMS コースのフォーマットを作り、担当教員がコース作成する労力を極力減らす、といった対策が必要になってくると考えられる。

5. おわりに

本稿では、筆者が担当した「アカデミック・ライティング」科目における LMS の活用事例について紹介を行った。LMS の活用は、授業内外において学生と教員とのコミュニケーションを活発にし、ライティング課題の作成を円滑に進めるうえで強力なツールであると考えられる。一方で、教員側がある程度、LMS 活用能力を備えていなければならず、また、

コース作成の労力もそれなりにかかるという現状がある。今後はこうした課題をいかに克服し、LMS の活用を広めていくかが鍵になってくるであろう。

引用文献

藤枝美穂(2019) アカデミック・ライティングを支援するライティングセンターの動向 大阪医科大学紀要人文研究 (50), 26-39

齋藤精機・森岡明美・小林雄志(2018) 岡山大学アカデミック・ライティング (AW) 科目意義と実践 岡山大学 全学教育・学生支援機構

小林雄志(2017) LMS を活用した授業科目における学習ログ分析—教養教育科目『インストラクショナルデザイン入門』の事例— 岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要 (2), 57-64

鈴木克明(2002) 教材設計マニュアル: 独学を支援するために 北大路書房

堀一成・坂尻彰宏(2014) 阪大生のためのアカデミックライティング入門 大阪大学 全学教育推進機構

大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂(2014) ピアで学ぶ大学生の日本語表現[第2版] ひつじ書房

井下千以子(2014) 思考を鍛えるレポート・論文作成法[第2版] 慶應義塾大学出版会